

恐怖のトポス

——近代イギリスにおける狂気・表象・権力——

中村 秀之

狂気は、社会空間の内部に正当な位置を持つことのできない強度の逸脱現象である。とはいえ、「狂気」として存在する以上、それは何らかの形象を与えられて社会・文化的な境界上に回収されている。そのような形象化は、精神医療による認知的または指令的な規範化に限られない。むしろ、第一次的な形象化は、恐怖のような感情形式によるものである。狂気を受容するための恐怖感情の戦略は近代においても機能している。ただし、規律化や表象化の交錯する複雑な条件においてではあるが。本稿は、十八、十九世紀のイギリスについて、恐怖と狂気の関係の諸類型を、グロテスクなもの、崇高なもの、無気味なものとして記述する。そこでは、狂気に対する恐怖が快楽の源泉として欲望されるようになる経緯も観察される。しかし、残酷とも呼ばれるかもしれないこの欲望は、狂気に関する別種の知の存在を示唆しているのだ。

【1】はじめに

かつてフーコーは、『狂気の歴史』において、近代における理性と狂気との関係を次のように描いた。すなわち、狂気は容赦ない強制——古典主義時代の「大監禁」——によって沈黙を課せられ、その後はこの沈黙の上で理性が冷静な独白を続けてきた、と (Foucault [1961→1972=1975])。しかし、近代が狂気と結んできた複雑な関係は、全く理性的なものであったというわけではないのだ。社会が逸脱現象をそれとして内部に位置づけようとするとき、そこにまず何らかの感情が随伴することは避けられない。逸脱というものが象徴秩序の壊乱や身体の危険に関わるものと思念される以上、随伴する感情は主として恐怖感である。さまざまな逸脱現象は、まず恐怖という感情形式において分節化される。これは時代によって異なるが、個々人の経験を超越しているという意味で、歴史的な先験性と呼びうる形式である。近代における狂気も、

この点では少しも変わらない。それどころか、近代社会と狂気との間の、いわば質的な関数として、恐怖感情の形式の変化を辿ることができるのである。

以下で試みられるのは、十八世紀から十九世紀のイギリスにおける、狂気に対する恐怖の感情形式についての素描である。選ばれたのは精神医療の先進国、しかも改革の時代である。当然、そこでは恐怖の源泉——例えば狂人——を理性的かつ人間的に除去しようとする広義の啓蒙的意志が実践を駆動していた。しかし、その傍らには、還元不能な恐怖を招き寄せようとする密やかな欲望があったのである。この欲望の「症候」を観察できるのは、もっぱら物語的表象の領域においてである。といっても、本稿は、恐怖のジャンルにおけるテキスト分析をめざすものではない。確かに、以下に見られるように文学テキストを特権的な資料として用いている箇所もあるが、それは、テキストを内在的に解

積することが最終目標なのではなく、むしろ、テキストを実践に対して併置し、両者の外在的な連関を記述したいからである。換言すれば、恐怖を招き寄せようとする欲望と恐怖を還元しようとする意志との — あるいは、それらと連関して機能する表象作用と権力作用との — 力動的な相互関係を探ることが、ここでの課題にほかならない。

ところで恐怖とは何か。以下の論述の便宜上、簡単な定義を与えておこう。アリストテレスは、レトリックの研究の中で次のように述べている。「恐怖 [フォボス] とは将来起こるであろう、破壊または苦痛をもたらす悪を思い浮かべることから生じる、一種の苦痛または心の動揺であるとしよう。... 人は... 大きな苦痛や破壊をもたらすものだけを恐れる... しかもそれらが遠くにはなく近くにあり、従って切迫しているように見える場合にだけ [恐れる]」(Aristotle [1966 : 105]、強調と [] 内の補足は引用者) すなわち、恐怖は、はるかに下って「存在と時間」におけるハイデッガーも再認したように、何か脅威となるものが「近さにおいて」接近してくる、という予期から生じる感情である。ここで特に重要な点は、恐怖が「近さ」の経験であるということ、これである。迫り来るものが恐ろしいのであるが、同時に、それが到達していない、あるいは決して到達しないがゆえに、恐ろしいのである⁽¹⁾。換言すれば、恐怖は、接近する脅威と脅かされる主体の受動的ポジションとの間に「近さ」それ自体が保持されるかぎりにおいて生じるのだ。恐怖への欲望は、この「近さ」そのものとの戯れから、脅威の源泉との隔たりの操作から、快樂を引き出そうとする。狂気のような逸脱現象を文化的に回収しようとするレトリックの戦略も、このような「近さ」の処理の仕方においてさまざまな

形態を取りうるのである。

【2】グロテスクなもの — 痕跡と笑い

十九世紀の半ばに国家が管理責任を認めるまで、イギリス社会は狂人の処遇に関するシステムティックな戦略を確立することはなかった。長い間、狂人の問題は家族や教区や都市ごとの対処に委ねられていた。その方法は、狂人自身の危険性や扶養責任者の経済状態などによって多様であり、狂人たちは、路上や私宅、あるいは監獄、救貧施設、民間の狂人専用宿泊施設 (private madhouse)、少数の公立病院などに散在していた (Fessler [1956]、Rushton [1988])。この点に関して、フーコーは、ヨーロッパの「空想上の風景」の中で狂気と水とが密接に結びついていたことを指摘しつつ、次のように述べている。「狂人が閾 (seuil) そのもの以外に牢獄を持つことができず、また持つべきでないとするれば、彼は、彼が通り過ぎようとするその場所で取り押さえられる。彼は外部の内側に置かれているし、その逆でもあるのだ」(Foucault [1961→1972=1975 : 28]) 狂人は、あたかも水に運ばれる小舟のように、本質的に定住できる場所を欠いた存在と見なされていたのだ。このような事態が意味しているのは、狂人の不在ではなく、むしろ、人々の生活空間における狂人の偶発的な現前 (presence) である。とはいえ、この現前はいささかも牧歌的なものではなかった。「狭い場所では狂った奴に気をつけろ」という十七世紀の諺は、この現前に対する人々の恐怖感を端的に表現している。民衆が抱いていた狂人のイメージは、突然理由もなく激しい暴力的行為に及ぶ危険な存在というものだった。当時の人々が、しばしば狂人を鎖や枷で拘束し苛酷に扱ったのも、野蛮な心性によるというよりも、ただ恐怖の対象を制圧したいがた

めであった (MacDonald [1981 : 121-142])。

狂人が偶発的に現前しうるといふこの状況において、中世以来、狂人を専門に収容してきた唯一の非営利的施設であるロンドンのベスレム (Bethlem) 病院は、自ずから、イギリスにおける狂気を象徴する特権的な場所となった。その異名ベドラム (Bedlam) は「気違い」を意味する普通名詞として用いられるようになったほどである。しかし、この時代のベスレム病院が、狂気を受容形式としての恐怖と結びつけて記憶されるべきであるとするれば、それは、より特殊な事情に関係がある。公衆が入場して狂人を見物することを許可していたこと、これである。慈善施設であるから、運営のための寄付という名目で入場料金を徴収していたのだ。事実、十七世紀後半から十八世紀を通じて、多くのロンドン市民や地方からの旅行者にとって、ベスレム病院は珍しい見世物を提供する娯楽施設となっていた。彼らは、狂人の奇矯な振舞いを見て嘲笑したり愚弄したりして楽しんだのである。例えば、1740年代に、サミュエル・リチャードソンは、書簡文例集の中で、ある若い女性がこの施設の印象を田舎の親戚に知らせるといふ設定で、次のように書いている。

「私は、これらの憂鬱な人々 [収容されている狂人] を見ている者の多くが、なぜあのように振る舞うのかわからず、途方に暮れてしまいます。あのような光景には避けられないはずの懸念のかわりに、彼らの表情にはある種の歓喜が現れているのです。悲惨な患者のほとんど理解できない病んだ空想を聞いて、無思慮な見物人たちは、陽気に大声で笑うのです。ぞっとする唸り声の数々や興奮した仕草も、あの人たちにはいずれも見世物なのです」 (Byrd [1974 : 89] による)

このテキストそのものは両義的である。一方で、表現されているのは、恐怖と同情が結合した書き手の感情である。これは、十八世紀後半以後に顕著になる人道主義的レトリックに類似している。他方、テキストが指し示しているのは「無思慮な見物人」の行動であり、彼らの「歓喜」である。この「歓喜」の質が問題なのだ。当時のスケッチには、狂人を見て驚愕し髪の毛を逆立てている見物人の姿を描いたものも残されている (Byrd [1974 : 図版3])。見物人たちが楽しみのためにやってきたのは確かだとしても、それは恐ろしいものを見たいという欲望からであったのだ。今やこの時期の狂気の社会史に関して第一人者であるロイ・ポーターも「ベドラムの真の魅惑は、フリーク・ショーのスリルであった」と断言している (Porter [1987 : 122])。

確かに、当時のベドラムの賑わいを説明するのに、狂人を一種のフリークとして見る視点は有効だと思われる。しかし、そこで歩みを止めず、ベスレム病院そのものを、パフチンの言うカーニバルの祝祭空間として捉えてみてはどうだろうか。すなわち、わずかな料金を払えば自由に出入りできるこの施設は、祭りの行われる「広場」なのである。実際、見物人が集中したのは復活祭やクリスマスという祝祭の時期であり、ベドラム周辺には見物客を当て込んだ娯婦やスリたちも集まって来た (Allderidge [1985])。そして、「民衆の笑いの文化」には不可欠とパフチンの言うグロテスクなイメージ、その役割を果たしたものこそ、狂人の身体とその身振りであった。「民衆の笑いの文化と結びついて中世およびルネッサンスのグロテスクは、おかしな怪物の形でしか恐ろしいものを、知らないのであって、つまりすでに笑いによって打ち

負かされたく恐ろしきもの>しか知らないのである。恐ろしきものはここではつねに滑稽で陽気なものへと変っている」(Бахтин [1965 = 1980 : 40] 強調は原文) (2)。

バフチンの言う「おかしな怪物としての恐ろしいもの」は、まさにフリークという存在の特徴にほかならない。レスリー・フィードラーも、バフチンとは独立に次のように述べている。「滑稽なるものと怪物的なるものとは、実際には両立しうるものなのだ... もとより、「フリーク」ということば自体、ラテン語の *lusus naturae* の訳語としての「自然の悪戯」(freak of nature) の省略された形であって... 異常であるとともに滑稽でもあるという意味を含意しているのである」(Fiedler [1978 = 1990 : 16])

フリークの語源は、狂人を恐れつつ笑い物にした伝統的慣行について考える手がかりを与えてくれる。そこに狂人は現前しているのだが、たとえ狂人が危険な存在だとしても、見物人たちはその危険から物理的に守られている。したがって、ここで滑稽さとともに喚起される恐怖は、日常の生活空間において狂人が現前するときの恐怖とは明らかに異質なものである。恐怖の源泉たる脅威は狂人から来るのではない。むしろ、それはつねにすでに到来してしまったものである。つまり、目の前の狂人=フリークは、圧倒的な力能を持つ自然が気紛れ(フリーク)に及ぼした威力の痕跡にほかならないのだ。このとき、フリークと見物人とは、同時に脅威の受動的ポジションを占めている。恐怖は脅威の接近の開示であるが、人は、脅威の痕跡の現前を通じてこの脅威の間近さに触れ、そのことによって恐れを抱くのである。したがって、恐怖とともに生じる滑稽さとは、脅威の痕跡の現前を単なるおかしなものの現前に転化して、あの脅威の間近さを遠ざけるための両義的で防衛的

な反応なのである。「実際、フリークというのが、どこかの小さな子供や封建領主のように退屈した心ない「自然」による冗談なのだとしたら、そこからかわれているのは他ならぬわたしたちではないか」(Fiedler [1978 = 1990 : 16 - 17])

【3】崇高なもの——情念の遠近法

十八世紀後半、ベスレム病院のサイド・ショーの賑わいがまだ消えていないその傍ら、狂人の専門施設への収容が徐々に進展しつつあった。簇生する民間のマッドハウス (Parry-Jones [1972])、散発的ながら都市ごとに設立される公立病院 (Donnelly [1983])、こうした専用施設に預託される狂人の数は確かに増加しつつあった。といっても、フーコーが早くも十七世紀半ば以後に起こったとする「大監禁」は、実際にはまだこの時期には起こっていない。「大監禁」は、十九世紀に入ってからのことである (cf. 中村 [1989 : 第Ⅲ部、第1章])。むしろ、奇妙なことに、多くの狂人が閉じ込められるようになるのに先んじて、公衆の想像力の方が監禁空間の表象に取り憑かれてしまうという事態が起こった。これは、具体的には、言説空間における「不当監禁 (wrongful confinement)」の物語の強迫的な反復として現れるのだが、狂気と社会との関係の変化における画期的なメルクマールとみなすことができるのである。なぜなら、ここで支配的な恐怖感情は、狂人に対する恐れではなく、狂人を収容する施設やその施設の管理者たちに対する恐怖だからである。狂人そのものの表象が背景に退き、狂人を攻囲する諸関係の表象が前景化するのこれが初めてのことである。

私立のマッドハウスが正気の人間を監禁しているという告発は、すでに十八世紀の初めから

デフォーなどによって行われていた (Hunter ; MacAlpine [1963 : 265-267, 358-363])。しかし、公衆に大きな衝撃を与えたのは、1763年の『ジェントルマンズマガジン』の記事だった。記事は、過去2年の間に裁判になった2つの不当監禁事件を取り上げ、この種の事件は財産目当ての親族や友人による陰謀であると報じた。

「或る人物が、強制的にまたは巧妙に欺かれて私立のマッドハウスに連れて来られるのは、他でもない、忍耐のない遺産相続者や金目当ての親類や見せかけだけの友人のせいである。そして、悪業に熟達した非人間的な無法者の一団に、難無く捕えられ、見ぐるみ剥がされて暗い部屋に運び込まれる。患者が不平を言うと、見張りは乱暴に命令し、仲間を呼んでベッドに縛りつけ、大人しくするまで放置するのだ。翌朝、医師が厳粛に招じ入れられるが、医師は見張りの報告を受け、この不運な男は狂人であると宣告し、身体的に拘束しなければならぬと明言する」(Jones [1972 : 29-30] による)

マッドハウスやその経営者を告発するこのような言説が、十八世紀後半には数多く生産された。新聞や雑誌記事、パンフレット、小説——スモレットの『サー・ランスロット・グリーヴズ』やウォルストンクラフトの『マリアまたは女の過ち』など——、不当監禁の物語が執拗に反復される。当時の医学界の権威さえも、新聞記事を引き合いに出して次のように述べるにいたる。

「マッドハウスの観念は、戦慄と恐怖という最も強い感情を引き起こす傾向がある...

患者がひとたびそのような場所に居を定めるべく運命づけられると、甚だしい残虐にさらされるばかりではない。回復のいかにかわらず、彼がいつか壁の外を見ることがあるとすれば、この上もない僥倖なのである」(ウィリアム・パーゲター『狂気に関する諸考察』(1792)、Parry-Jones [1972 : 222] による)

不当監禁は当時の流行の犯罪だったのだろうか。マッドハウスは実際に私的な暴力装置として機能していたのだろうか。私立のマッドハウスについて詳細なモノグラフをまとめた社会史家のパーリー＝ジョウズによれば、不当監禁の事実を証明する史料は実際には乏しいのである (Parry-Jones [1972 : 222])。すると、不当監禁の物語は、事実の反映というよりも、むしろ物語への固有の欲望によって紡ぎ出されたものと考えべきだろう。確かに、事実としての不当監禁が皆無であったというわけではなからう。しかし、このトピックスは、表象の領域に固有の厚みによって独特の屈折を被り、物語の欲望の対象として公衆に歓迎されたのに違いない。そして、このような屈折がもたらされた背景には、感情形式におけるこの時代の大きな変化があったのである。

十八世紀の後半におけるこの変化とは、情念に対する態度に関わるものである。情念 (passion) は、定義上、主体における受動的な出来事であって、知性の伝統的課題は、自己の情念からいかに自分を守るかという点にあった。しかし、情念の制御という、いわば政治学ないし経済学的な課題とは別に、情念から快楽を引き出そうという美学的な課題もこの時代に追求されるのである。つまり、情念の生起を一定の枠組において操作し、情念そのものの動態

を觀照すること。逆に言えば、表象された二次的な情念を楽しむという形で情念の危険と折り合いをつけること。このような情念との関係の変化に関するいわばメタ言説を、我々は同時代の崇高の美学に見出すことができる。

1757年の『崇高と美についての我々の觀念の起源の哲學的研究』において、エドモンド・バークが「美」と対立する美的概念としての「崇高」を初めて理論的に定式化した。カントの『判断力批判』（1790）にも影響を及ぼした画期的な業績である。それでは、崇高なものとは何か。バークは、まず快と苦に関するロックの所説に対する批判から出発し、苦の減少ないし除去を積極的な快と区別すべきであると主張する。バークによれば、大いなる苦からの解放は「畏敬の念をたたえた極めて嚴肅な状態、恐怖の影がさした一種の平穩状態」をもたらすのであり、これは積極的な快とは異なる感情である。バークは、このような「相対的な快」を、特に「喜悅 (delight)」と呼び、この喜悅を惹き起こすものをすべて「崇高」と名づける。ところで、苦や危険の觀念は自己維持にかかわる情念すなわち恐怖をもたらすものである。それゆえ「何らかの意味において恐ろしい感じを与えるか、恐るべき対象物とかかわり合って恐怖に類似した仕方で作用するものは、何によらず崇高 (the sublime) の源泉」なのである (Burke [1757 = 1973 : 43]、強調は原文)。もちろん「危険や苦が余りにも身近に迫って来る場合にはそこに何らかの喜悅が生まれる余地は有りえない故、それは端的に恐ろしく感ぜられるであろう」、むしろ「我々が苦と危険の觀念を持っていても実際にはそのような状況に置かれていない時にはそれは喜悅となる」のである (Burke [1757 = 1973 : 44, 57]、強調は引用者)。

崇高と恐怖の関係は以上のとおりである。さ

らに本稿の関心との関連においてバークの議論を再構成してみよう。まず、バークの崇高論が、第一義的には外的自然にかかわるものであることを忘れてはならない。それは十七世紀末以後に形成されてきた自然に対する新しい美的感性——調和的なものよりも、峨峨たる山嶺、荒れ狂う海原、火山の猛威などを好むバロック的な感性の理論的な総括であった (cf. Nicolson [1968 = 1986])。したがって、恐怖の源泉である脅威も自然のそれにほかならない。ところで自然の脅威とは、グロテスクなものにおけるような痕跡でない場合には、それ自体の現前であろう。すると、この場合、恐怖と喜悅の差異はいかにして可能になるのだろうか。「実際にはそのような状況に置かれていない時」とバークは言う。しかし、悲劇における観客が、ミメシスによってつねにすでに劇中の英雄に迫る運命の脅威から隔てられているようには、崇高における主体は自然から隔てられてはいない。むしろ、崇高を感じる主体は、事後的にこの隔たりを獲得するようである。つまり、脅威が接近してくる受動的ポジションにまず身を置くことで恐怖を覚え、次にこのポジションから脱け出し、さらに空白のポジションへの脅威の接近を距離をおいて眺めやる。あたかも、沈没する船から救出された乗組員たちが、今しも海に呑み込まれる無人の船体を振り返るときのように。このとき生じるのが「相対的な快」としての喜悅であり、崇高なのである。実際、喜悅の概念を導入する箇所、バークは「切迫した危険から逃れたり或る甚だしい苦痛の辛さから解放された時」の心の状態を想起するよう読者に求めていた (Burke [1757 = 1973 : 37 - 38])。こうして、崇高における主体は、接近する脅威と脅かされる受動的ポジションの関係を保持しつつ、この「近さ」そのものの位置ずらしを行う

ことによって、恐怖の体験自体をずらす。そして、結局のところ、情念の遠近法とも呼ぶべきこのような心的操作によって、主体は、そもそも脅威の源泉であったあの自然の力の作用を、自らの情念の高揚へと接続することができるのである。

「... 或る個人の心中でその当人の評価を高めるのに役立つものは、必ずや人間の心に極めて楽しい一種の慢心ないし勝利感を生み出す。そして人間の心は常にそれが観想する物に備わっている威厳と重みの一部分を自分にも要求する故に、この慢心は我々が身の危険のない処で恐ろしい対象物と関わりを持つ場合にもまして、明確に意識され強力に作用することはない。」(Burke [1757=1973: 56])

このように、崇高美学は、外的自然を前にしての情念の遠近法であった。しかし、ちょうど同じ頃、文学の領域では、内的自然 — 人間の情念 — との関係における情念の遠近法も追究されていた。それは、ゴシック小説である。俗にホーレス・ウォルポールの『オトランドの城』(1764) からチャールズ・ロバート・マチュエリンの『放浪者メルモス』(1820) までが最盛期とされる古典ゴシック小説は、人間の情念とその暴虐という主題を執拗に反復した。例えば、マシュー・グレゴリー・ルイスの『マンク』(1796) では、廉潔の士と世に聞こえた修道僧のアンプロシオが悪魔の誘惑によって墮落し、ついには実の妹を凌辱して殺してしまう。また、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』(1818) においても、死体から新たな生命を再生しようという異様な野心に取り憑かれたフランケンシュタインが、自分の作り出した怪物との闘争によって破滅する。ゴシック小説の物語

世界は、脅威の源泉たる威力が人間自身の情念にほかならないこと、しかも作中人物が、そのことを物語の展開によって発見するように強いられる — あるいはその真実が読者に暴露される — という点で、共通の恐怖の構造を有している。

ゴシック小説の作者たちは、このような情念と恐怖の関係にきわめて自覚的であった。アン・ラドクリフは、「魂を拡張し、より高度の生への諸能力を喚起する」恐怖 (terror) と、そうした能力を「萎縮させ、凍りつかせ、ほとんど殺してしまう」戦慄 (horror) を区別し、前者を自分の小説の目標とした (Ellis [1989: X VII] に引用)。ウィリアム・ゴドウィンも、『ケイレブ・ウィリアムズ』を「追われる者は大きな災難のために圧倒されるのではないかとの絶えざる恐怖に襲われ、追う方は知恵と手段を尽くして犠牲者を脅やかす」物語として書いた (Godwin [1970=1982: 252])。富山太佳夫はこの小説を「情念と情念の迫害劇」と呼んでいる (富山 [1975→1982: 289])。また、メアリー・シェリーも「人間の本性の持つ神秘的不安に向けて語りかけ、ぞっとする恐怖をよびさます物語」として『フランケンシュタイン』を構想した (Shelley [1831=1984: 9])。こうして、ゴシック小説は、情念に対する恐怖を主題として、この恐怖から尽きざる快樂を引き出そうとした斬新なジャンルであった。巡回図書館 (circulating libraries) という新たな小説マーケットを通じて、これらの小説は情念に対する情念の遠近法を楽しむ新たな小説読者を生産したのである⁽³⁾⁽⁴⁾。

ところで、このような情念との関係の変化は、実は精神医療の分野にも見出されるのである。それは、狂人管理の戦術的イノベーションによって、狂人の対象化が進行することと関係が

ある。十八世紀半ば以後、「管理 (management) と呼ばれた新しい方法が、伝統的な排出療法に依存した従来の「医術 (medicine)」よりも優れた治療法として提唱され始めた。この方法の目標は、治療者と患者との対面的関係を重視し、治療者の人格的な影響力によって狂人の行動を従順にすることにあった。ポーターは、これを「世俗的な精神感応」と呼んでいる (Porter [1987: 222])。その内実は、親切な態度と威嚇とを巧みに使い分けて患者を支配する「機転または如才なさ (tact)」——「管理」の提唱者たち自身がこの言葉を用いていた——にあった (中村 [1989: 147-152])。ここで注目に値することは、治療者が狂人の恐怖感を行動操作の支点として積極的に活用したことである。当時の医師たちは、まなざしの力だけで狂人を支配できると標榜していた。恐怖に関して狂人と非狂人との関係が逆転したのである⁽⁴⁾。少なくとも、治療空間内の対面的接触においては、脅威の受動的ポジションを占めるのは狂人の方である。情念のこのような戦術的操作によって、狂人は対象化=客体化される。この時点ではまだ治療者個人の能力に依存する技芸という性格が強いが、やがて、この対象化は、社会空間の全域に広がるパノプティックな視線構造として一般化されてゆくだろう。この匿名の視線と一体になることで、公衆は狂人を安全な隔たりから見られるようになる。ここに、狂人の表象が快楽の源泉として再浮上する条件が整うのである。

1815年にベスレム病院の調査を行った民間の博愛家ウエイクフィールドは、そこに収容されていた患者の一人ジェームズ・ノリスの悲惨な状態について公表した。ウエイクフィールドは画家を連れて訪問し、ノリスの監禁の状態をスケッチさせた。その絵は版画として大量に複製され、改革のキャンペーンに利用される。ノ

リスは、通常の足枷に加え、両肩から胸と上腕を巻く鉄のハーネスと鉄の首輪によって、床に打ち込まれた鉄柱に繋がれていた。ところで、ノリスの絵には少なくとも2つのヴァージョンがある。1つは、スケッチの原画であり、議会の調査委員にも示された証拠である。2つめは、このスケッチをもとに作成されブロードサイドとして流通した複製である⁽⁵⁾。両者を比較すると、原画がより写実的なのはその目的から当然だろうが、複製におけるイメージの変形の仕方が興味深い。ノリスの容貌は原画よりも遙かにやつれていて眼も落ち窪み凄惨な様子である。しかも、ノリスが繋がれた独房の様子も異なっていて、複製では、石の壁の冷たい感触が強調され、暗い室内と壁の高みにある格子入りの窓の外の明るさが対照をなしている。要するに、複製では監禁空間のゴシック的な恐怖感が強調されているのだ。ここには、安価な大量出版物において恐怖を楽しもうとする公衆の欲望が顔を覗かせている。崇高美学やゴシック小説における情念の戯れは、十九世紀に入るとより通俗的な次元を獲得してゆくのである。

【4】無気味なもの——抑圧されたものの回帰

十九世紀前半はイギリスにおける精神医療改革の時代だった。この改革に、パラダイム——以後の実践の範型になるような画期的業績、という意味での——を提供したのが、ヨーク保養所である。よく知られているように、1796年にクエーカー教徒によって創設されたこの施設と、そこで実施されたモラル・トリートメント (moral treatment) は、狂人の看護と治療において大きな影響をもたらした。モラル・トリートメントの特徴は、患者に対する心理的アプローチと収容施設の快適さを重視する点にあった。この意味で、すでに述べた「管理」を継承する

ものである。しかし、この方法が独創的だった点は、治療者と患者との関係を親子関係に、治療行為を子供の教育に、そして収容施設を家庭に擬したことである。保養所の施設自体、当時のブルジョワ階級の家屋のスタイルを模して建てられたもので、親しみやすい外観と内装を備えていた。施設を監督するジェブソン夫妻のもとで患者たちが送っていた静穏で親密な生活は、訪れる見学者たちを驚かせたという。この「家庭」の中で、患者は子供として扱われ、家父長としてのジェブソンは、患者を安楽な状態に保護するよう気を配り、権威と愛情と誠実さをもって彼らを介護した。患者の方ではほとんど皆が子としての愛着をジェブソン夫妻に抱いていたと報告されている。治療行為の主眼は、子供の教育に擬して、心理的な報酬と処罰により自己統禦の能力を回復することにあった。このような治療による回復率の高さは同時代人に衝撃を与えたという (cf. Digby [1985 : ch. 3-4])。

従来の狂人の施設が、公衆に対して、恐怖や同情を喚起する残酷で悲惨なものとして表象されていたということはすでに述べた。それゆえ、ヨーク保養所とモラル・トリートメントが、狂人のための家庭として、新しい実践のモデルであるのみならず、新しい精神病院の表象のモデルになったのも当然だろう。家庭こそ、外界の危険から人を保護する安息の地だからである。もちろん、平安な避難所として家庭が明示的に理想化されるのは、もっと後になって、ヴィクトリア時代も最盛期の頃である。しかし、そのような理想化は、十七世紀以後に徐々に形成されてきた「閉鎖的家庭内の核家族」(Stone [1979=1991 : 第4部]) を現実的基盤とするものであり、ある程度は十九世紀の前半すでに共有されていた意識の表現だったと思われる。

精神病院 — この頃から、アサイラムという呼称が用いられるようになる — の家庭モデルは、公衆のそのような意識に歓迎されたのではなかろうか。実際、施設の家庭化は、実践面でも表象化の点でも、十九世紀前半に次々に新設される公立のアサイラムに関して行われていった。これらは、貧民狂人を対象とするもので、自ずから従来の民間施設よりも規模の大きいものであり、家庭化の導入には本来不利な条件を持っていたのであるが。

公立アサイラムの家庭化は、無拘束 (non-restraint) 運動と呼ばれた。その代表的人物は医師のジョン・コノリーである。先例はあったものの、ロンドン近郊の大規模なアサイラムで全面的に拘束具を廃止した快挙によって、コノリーは、50年代までには国際的にも知られる改革の英雄になった (松村 [1991 : 182-184])。コノリーも家庭モデルを重視して次のように言っている。すなわち、この改革の目標は、アサイラムの医療管理者が患者を子供のように愛するようになることであり、患者の心労と喜びが彼の労苦と喜びになり、彼の心情のすべてが患者に捧げられることである (Showalter [1987 : 28] による)。こうして、アサイラムは、住み込み医療監督者とその妻を中心とする家庭に擬せられた。施設の建築様式も、その規模の大きさにもかかわらず、宮殿のようにではなく、居心地のよい別荘のように設計されるべきであると主張された。「施設は、色々な点で患者がそこから連れてこられた家に似ているべきである。なぜなら、彼らは、その住居の家庭らしさ (homeliness) を愛し、それに慣れ親しんできたのだから」と、改革の有力者の一人は述べている (W. A. F. ブラウン「精神病者のモラル・トリートメント」(1864)、Showalter [1987 : 36] による)。

アサイラムの家庭化 (domestication) は、このように、実践面においては、人間に内在する威力を対象とする馴致 (domestication) であった (cf. Scull [1983])。医療監督者は、狂気への恐れから発する自身の暴力的な反応を抑制し、教育的関係におけるような力の戦略的配分を旨としなければならない。この教育は、患者の狂気による威力の発現を抑えて自己統禦の能力を増大することをめざすのだが、その際、疑似親子関係の強制に見られるように、あくまでも「服従する身体」の形成を目的としている。要するに、アサイラムの家庭化とは、精神医療の領域において定式化された規律化のプログラムにほかならない⁹⁾。ところで、表象の空間は、このような権力のプログラムをじかに反映したわけではない。むしろ、表象化は、その固有の厚みにおいて実践の作用を屈折する。家庭の理想化とは、安全であるという自己意識、換言すれば、受動的ポジションにある主体による、脅威の不在の享楽であるが、この享楽は、脅威の源泉たる威力の抑圧によってはじめて可能であった。ここで抑圧と言うのは、家庭という場における威力の否認が行われ、この否認そのものが無意識的なものであるからだ。威力は、家庭の外部にあるもの、内部で噴出することはありえないものとみなされていたのだ。しかし、表象の領域において、実践のプログラムを食い破るようにして、抑圧されたものが回帰する。それこそ、十九世紀に固有の狂人の表象にほかならない。

なるほど、家庭化のプログラムの直接的な反映、あるいはむしろプログラムの戦術的要素として機能するような表象も生産された。例えば、チャールズ・ディケンズは、1852年の1月、自分の発行する雑誌『家庭の言葉 (Household Words)』に、聖ルカ病院の探訪記事を掲載し

た。これは、毎年ボクシング・デイに病院内で催されているお祭りを、ディケンズ自身が取材し執筆したものである。器械的拘束の廃止された施設を昔の残酷な時代と比較し、そこに現在収容されている患者たちを、奇妙だがおとなしい、むしろ愛すべき人々として描写したこの記事は、人々が内なる恐怖を抑えて愛情をもって接しさえすれば、狂人は社会復帰が可能な存在になることを読者に訴えている。8年後、聖ルカ病院はディケンズの許可を得て、この記事を手紙として発行している (Gilman [1988: 81-86])。言説が、まさに実践の一部として働いた例である。ディケンズは、コノリーの友人であり、社会改革の意図からこのような記事を書いたのである。

しかし、興味深いのは、そのディケンズが、無拘束運動が導入される前の1837年に書いた「狂人の手記」である。この小説でディケンズが利用しているのは、無拘束運動どころかモラル・トリートメントよりもはるか以前の狂人のステレオタイプである。すなわち、残忍な気性を持ち、ひとたび激すると異常な体力を発揮し、しばしば混乱するといえ悪巧みにかけては常人を遥かにしのぐ、といった危険な存在である。狂人のこのようなイメージによって、ディケンズがこの作品で主題化しているのは、人間の攻撃性である。この作品は、自分が狂人であることを強く自覚しながら生きているある男が、初めは自分の狂気に怯えているがやがてこの狂気に身をまかせ、妻とその兄とを殺害する顛末を一人称で語っている。ディケンズのこの短編が、ゴシック小説の系譜に連なるものであることは明らかである。しかし、すでにここには、特殊に十九世紀的な恐怖感情の形式も見られる。すなわち、脅威の源泉としての情念が、或る極端な間近さにおいて見出されるという点である。

このテキストにおいて何よりも異様なのは、自分が狂人であるという語り手の主張の執拗なことであるが、これは、決して殺人という行為を弁解するためのものではない。むしろ、語り手の語りを突き動かしているのは、みずからの暗い情念に怯えていた自分がついにこの情念そのものと化すことで恐怖から解放されるという倒錯した喜びである。「気違いになるってのは、大したことなんだ。… 気違い病院ばんざあい！何と素晴らしい場所だ！」(Dickens [1837=1986: 82]) 古典ゴシック小説においては、情念の恐怖は物語において明示的に語られる内容＝メッセージであった。しかし、「狂人の手記」の場合、語りの運動そのものに、文字通り狂気じみた情念の衝迫が感じられる。換言すれば、テキストの存在そのものが情念の強度を伝えようとしているのである。そして、このような強度のテキストは、シャーロット・ブロンテの「ジェイン・エア」(1847)に、さらに顕著に見出される。

「ジェイン・エア」には、注目すべき狂人が登場する。ジェインが家庭教師として住み込む館の主リチャードの妻バーサである。リチャードは、バーサを館の内部に秘密裡に監禁したまま、ジェインと結婚しようとする。しかし、結婚式の現場で重婚が告発され、追いつめられたリチャードの告白によって、ジェインはバーサの存在を知る。その直後の場面に登場するバーサは、先のディケンズの狂人同様、古いステレオタイプによって描かれている。恐ろしい腕力を発揮することができ、監視者の隙を突く狡猾さを持っている。その風貌は獣のようだ。しかし、サンドラ・ギルバートとスーザン・グーバーが指摘したように、テキストの中で、この女性性はきわめて重要な機能を担っている。すなわち、バーサは主人公ジェインの「最も真実の、

最も暗い分身」なのである (Gilbert ; Gubar [1979 : 360=1986 : 314])。分身と言っても、物語世界の内部で明示的に描かれているわけではない。ジェイン自身が狂女をそのように見てはいないし、また、作者ブロンテも、多少とも共感をもってバーサを描いているわけではない (Showalter [1985 : 68-69])。しかし、テーマイック (イメージ体系) の上では、この分身性は明らかである。例えば、結婚式の前夜、バーサはジェインの部屋に忍び込み、ジェインのヴェールを引き裂くのだが、ろうそくの光に目を覚ましたジェインがバーサの姿を見る場面は、ジェイン自身によって次のように語られる。

「… まもなくそのひとは、ヴェールをあ
の場所から取って、高くもちあげ、長い間み
つめていましたが、それを自分の頭にふわり
と落として、姿見のほうに向きました。その
瞬間、薄暗い楕円形の鏡の中に、顔と目が映
ったのを、わたくしは、はっきりと見たので
す。… 恐ろしい、気味の悪い——ああ、わ
たくしはあんな顔は、見たことがない！」
(Brontë [1847=1957下 : 87]、強調は引用者)

ジェインは、あたかも自分自身を見るかのよ
うに、バーサの顔を「鏡の中に」見る。実際、
ギルバートとグーバーも強調するように、バー
サは繰り返し「ジェインと同じように行動する」
(Gilbert ; Gubar [1979=1986 : 316-317])。獣
のようなバーサは、ジェインの憤怒——家父
長制社会の中で自立を妨げられる意志の人ジェ
インの憤怒——にほかならない。ジェインが最
終的にリチャードと結ばれるのも、バーサの放
った火によって館が燃え、リチャードが視力と
片腕を失ってからである。リチャードを言わば
去勢するこの炎は、ジェイン自身に親しいイメ

ージとして繰り返されるものである。初期ヴィクトリア朝社会は、このようなテキストの仕掛けに敏感に反応した。同時代のある評者は、「ジェインは罪深く、教化できない (undisciplined) 魂の擬人化である」と非難した (Gilbert ; Guber [1979 : 337=1986 : 283-284])。この作品が読者を刺激した原因は、物語内容だけでなく、テマティックに現れているような狂気に対する独特の遠近法的操作にもあったのではないだろうか。古典ゴシック小説では、脅威の源泉たる情念は、古城や監獄や荒野のようなしかるべき舞台設定に投射され、物語の内容として表象されていた。ところが『ジェイン・エア』では、読者が、非日常的な境位において恐怖を享受できるような距離が設定されていない。脅威の源泉たる暴力的な力は、物語内容としてではなく、反復されるイメージによって女性主人公と重ね合わされる。これは、読者を不安にさせるようなレトリックの戦略である。恐怖を楽しむための距離、言い換えれば、適正な「近さ」が意図的に廃棄されているのだ。しかし、この「近さ」の廃棄は、狂気を表象する (represent) ことによってある真実を現前させる (present) ための戦略であった。

『ジェイン・エア』に現れているような恐怖感情の形式は、二十世紀になってからフロイトが定式化した「無気味なもの」によく似ている。フロイトによれば、一般に無気味なものとは、もともと心的生活にとって親しい何ものかだったのであり、それが抑圧によって疎遠にされた後に再び意識に回帰するときに「無気味なもの」と感じられるのである。狂気の気味の悪さも、ある力の現れをそこに認めることから生じるのだが、その力とは「隣人のうちにあるとは思ってもみなかった力であり、またしかし、自分自身のどこか片隅にその気配をほんやりと感ず

ることができるものである」(Freud [1919=1969 : 349]) 要するに、『ジェイン・エア』のようなテキストは、規律化の戦略によって一度抑圧された暴力的な力を、テキストそのものの効果によって読者に触知させる — あるいは回帰させるのである。この回帰は、ある種の知の覚醒である。それは、網の目状の力関係から無縁ではありえないにしても、少なくとも支配に結びついた知とは別種の知であり、不合理な経験の中で開示される自己自身についての知である。十九世紀後半の文学テキストは、このような「無気味さ」による知の探究の系譜を持つように思われる。しかし、それについて述べることは、もはや本稿の課題を越えている。

【5】おわりに

以上、近代における狂気に対する恐怖感情の形式を、グロテスクなもの、崇高なもの、無気味なものという類型に整理した。本稿がめざしたものは、あくまでも形式に関する第一次的な近似であって、恐怖感情の内容が意味するものの解釈については今後の課題としたい。最後に、本論では十九世紀半ばまでしか扱っていないので、私たちのこの現在について一言触れておこう。— 無気味なものが、脅威の源泉との距離を戦略的に廃棄することによって成立するとすれば、二十世紀に支配的な恐怖感情は、この脅威を内在化 (むしろ内臓化?) し、身体的解体の表象と戯れる「おぞましき」である。「死にまでいたる恐怖の賞揚」とでも言おうか。今世紀後半の映画の傾向を見れば、それは誰の目にも明らかだとさえ言える。『サイコ』(1960) は、あの浴室の惨殺の場面に顕著に現れているように、「近さ」の戯れによる様式美をかるうじて残している極限的なフィルムである。しかし、トビー・フーパーの『悪魔のいけにえ』(1974)

に至ると、周到に狙われている効果は内臓感覚の戦慄であり、嫌悪である。そこから快楽をひきだすことは誰にでもできることではないだろう。私たちは、このような「おぞましき」の時代に足を踏み入れてすでに久しいのだが、その意味はまだ十分に解明されてはいない。

註

(1) ハイデッガーは、第一篇第五章第三十節「情状性の一つの様態としての恐れ」において次のように述べている。

「4 有害なものは、脅威をおよぼすものとしては、制御しうる近さにはまだ来ていないのだが、それは近づいてくる。そのように接近してくるこのうちで有害性は発散するのであって、この点に脅威をおよぼすというその性格がある。
5 この接近は近さの範囲内でおこなわれる接近である。… 接近してくるこのうちで、このような「するかもしれないが、結局はやはりしないかもしれない」ということが高まる。そこで、恐ろしい、とわれわれは言うのである」
(Heidegger [1927=1971: 260])

(2) 十八世紀のイギリスに「中世・ルネッサンスに特有」と言われている概念を適用するのは、アナクロニズムという非難を招くかもしれない。しかし、先に引用したリチャードソンにおいてもそうだったが、十八世紀の文献でベスレムの件の慣行が言及されるときには、古い時代の残酷な心性の名残りとして非難されることが多かったようである。つまり、伝統社会の経験形態が、なお根強く残存していたということである。まして、すでに指摘されているように、バフチンのカーニバル概念そのものが、厳密に歴史的なものというより理念型として受容されるべきものであるとすれば

(桑野 [1987])、ここでバフチンを援用することに無理があるとは思えない。

(3) 不当監禁の物語と古典ゴシック小説は、物語構造そのものにおいても共通点を持っている。いずれにおいても、支配的な恐怖感情は、家族という身近な関係において生じる暴力的な葛藤に対するものである。実際、不当監禁の基本パターンは、結婚問題のこじれから父親が娘を監禁したり、財産を奪うために同胞を閉じ込めるというものだった。ゴシック小説においても、「マンク」や「ケイレブ・ウィリアムズ」のような「男性ゴシック」は、明らかにエディプス神話の変奏として読むことが可能である。「フランケンシュタイン」のような「女性ゴシック」といえば、こちらは、前エディプス期の神話として解釈できる。死体から作られたあの無名の怪物は文字通り「寸断された身体」であり、生みの親であるヴィクターとの否定的な関係においてしか自己を確認できないこの怪物は、まさに「想像界」の不安定さの隠喩である。

(4) 本稿では、情念の遠近法という観点から、崇高美学とゴシック小説とを併置した。もちろん、文学史研究の領域では、ゴシック小説と崇高美学との関係はよく論じられてきた主題であり、両者の関係も単純なものではない。例えば、デヴィッド・モリスは、一見本稿の見解と対立するのだが、「ゴシック的崇高性」をフロイトの「無気味なもの」によって解釈しようとしている (Morris [1985])。しかし、モリスの議論は、個々の作品の物語内容に照準するもので、本稿のように表象の存在様態と恐怖感情の形式を問題にするものではない。「無気味なもの」の扱いの相違は、何よりもこのような分析視角の差異から生じているものと思われる。

(5) この時期の医療において — 主として大陸の動向に関してだが — 、患者の情念、特に恐怖が戦術的に利用されたことについては Luyendijk-Elshout [1990] に詳しい。

- (6) ノリスの図像は多くの関連書に見出すことができるだろうが、例えば、オリジナルのスケッチは Scull [1979] に、複製については Hunter ; MacAlpine [1963 : 695] に掲載されている。
- (7) 家庭の理想化の典型的な表現は、しばしば引用されるジョン・ラスキンの1864年の講演に見られる。

「男性は、世間での荒仕事で、あらゆる危険や試練に遭遇しなければならない。したがって男性には、失敗・罪科・不可避の過誤もつきものです。…しかしそのかわり、男性はこれらすべてのことから女性を守ってやります。が、その家のなかには女性に統治されるわけで、女性が自分で求めでもしないかぎり、なんの危険も誘惑も、過誤・罪科の原因もはいるわけがありません。これが家庭というものの真実の性質です—家庭は「平安」の場所であり、すべての危害からだけでなく、すべての恐怖・疑懼・分裂からの、避難所です」(Ruskin [1882 = 1979 : 242])

- (8) このプログラムの破綻が露呈するのにさして時間はかからなかった。ヨーク保養所において、その規模の小ささと、特にクエーカー共同体という特殊な条件によって成功したモラル・トリートメントは、大規模な公立アサイラムでは有効に機能しなかったからである。疑似的な親子関係は、結局、監督者と患者の葛藤の顕在化によって瓦解する運命にあった。70年代には、患者をアサイラム

から地域社会に戻し「治療共同体」によって介護するという構想さえ、早くも一部では語られるようになる (cf. McCandless [1979])。

- (9) 古典ゴシック小説と十九世紀のゴシック的な小説とのこのような差異に関しては、『フランケンシュタイン』とプラム・ストーカーの『ドラキュラ』(1897)を比較したフランコ・モレッティの分析から示唆を得た。モレッティによれば『フランケンシュタイン』は「読者を恐がらせようとするのではなく、納得させようとする…恐怖はテキストとその受け取り手との関係に介入することなく、テキスト内部で解消される」。ところが『ドラキュラ』においては「登場人物たちの恐怖はまた読者の恐怖ともなる。テキストと読者のあいだにはもはや距離はない」(Moretti [1988 = 1992 : 49 - 50] 強調は原文)。しかし、私がモレッティの見解に全面的に同意するものでないことは、本文に述べたところから明らかだと思う。差異は、読者に恐怖を喚起させるか否かではなく、恐怖という感情形式の差異にある。モレッティは、古典ゴシック小説に恐怖感を覚えな現代の読者としての体験を、作品の分析に投射しているように思われる。なお、恐怖感情の内容に関わるという意味で本稿の課題を越える問題だが、文学における恐怖の機能をイデオロギー的な従属の媒介とするモレッティの主張にも賛成しがたい。むしろ、恐怖は、倒錯した形において或る種のユートピアへの潜在的志向を示している、と私は考える。

文献

- Allderidge, Patricia 1985 "Bedlam : fact or fantasy?" Bynum ; Porter ; Shepherd (eds.), *The Anatomy of Madness*, vol.2 Tavistock : 17 - 33
- Aristotle *Τεχνική Ρητορική*, = 1966 池田美恵訳「弁論術」『世界古典文学全集16 アリストテレス』筑摩書房
- Бахтин, Михаил Михайлович 1965 *Творчество Франсуа Рабле и народная культура средневековья и ренессанса*, Москва = 1980 川端香男里訳『フランソワ・ラブレの作品と中世・ルネッサンス

の民衆文化』せりか書房

- Brontë, Charlotte 1847 *Jane Eyre*. = 1957 遠藤寿子訳『ジェイン・エア』上・下 新潮文庫
- Burke, Edmund 1757 *A Philosophical Inquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful, with an Introductory Discourse concerning Taste, and several other Additions*. = 1973 中野好之訳「崇高と美についての我々の観念の起源の哲学的研究」『エドモンド・バーク著作集 I』みすず書房
- Byrd, Max 1974 *Visits to Bedlam : Madness and Literature in the Eighteenth Century*, University of South Carolina Press
- Dickens, Charles 1837 "A Madman's Manuscript" = 1986 小池滋訳「狂人の手記」『ディケンズ短編集』岩波文庫
- Digby, Anne 1985 *Madness, Morality, Medicine : A Study of the York Retreat, 1796 - 1914*, Cambridge University Press
- Donnelly, Michael 1983 *Managing the Mind : A Study of Medical Psychology in Early Nineteenth-Century Britain*, Tavistock Publications
- Ellis, Kate Ferguson 1989 *The Contested Castle : Gothic Novels and the Subversion of Domestic Ideology*, University of Illinois Press
- Fessler, A. 1956 "The Management of Lunacy in Seventeenth Century England. An Investigation of Quarter-sessions Records" *Proceedings of the Royal Society of Medicine, Section of the History of Medicine* 49 : 901 - 907
- Fiedler, Leslie 1978 *Freaks : Myths and Images of the Secret Self*, Simon & Schuster = 1990 伊藤俊治・旦敬介・大場正明訳『フリークス 秘められた自己の神話とイメージ』青土社
- Foucault, Michel 1961 *Folie et déraison : Histoire de la folie à l'âge classique*, Plon → 1972 *Histoire de la folie à l'âge classique*, Editions Gallimard = 1975 田村俶訳『狂気の歴史 — 古典主義時代における』新潮社
- Freud, Sigmund 1919 "Das Unheimliche". = 1969 高橋義孝訳「無気味なもの」『フロイト著作集 3 文化・芸術論』人文書院
- Gilbert, Sandra M. ; Guber, Susan 1979 *The Madwoman in the Attic : The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*, Yale University Press = 1986 山田晴子・藺田美和子訳『屋根裏の狂女—ブロンテと共—to—』[抄訳] 朝日出版社
- Gilman, Sander L. 1988 *Disease and Representation : Images of Illness from Madness to AIDS*, Cornell University Press
- Godwin, William 1794 *Caleb Williams*. = 1982 岡照雄訳『ケイレブ・ウィリアムズ』ゴシック叢書18 国書刊行会
- Heidegger, Martin 1927 *Sein und Zeit*. = 1971 原佑・渡辺二郎訳『存在と時間』中央公論社
- Hunter, Richard ; Mcalpine, Ida 1963 *Three Hundred Years of Psychiatry 1535 - 1860 : A History Presented in Selected English Texts*, Oxford University Press
- Jones, Kathleen 1972 *A History of the Mental Health Services*, Routledge & Kegan Paul
- 桑野隆 1987『バフチン <対話>そして<解放>の笑い』岩波書店
- Luyendijk-Elshout, Antoine 1990 "Of Masks and Mills : The Enlightened Doctor and His Frightened Patient" Roussau, G. S. (ed.) *The Language of Psyche : Mind and Body in Enlightenment Thought*, University of California Press : 186 - 230
- McCandless, Peter 1979 " "Build! Build!" The Controversy over the Care of the Chronically Insane in England, 1855 - 1870" *Bulletin of the History of Medicine*, vol. 53 : 553 - 574
- MacDonald, Michael 1981 *Mystical Bedlam : Madness, Anxiety, and Healing in Seventeenth-Century England*, Cambridge

University Press

- 松村高夫1991「『貧民狂人』とモラル・トリートメント — 一八四五年「狂気法」のパラドックス」『英国をみる — 歴史と社会』リプロポート：175-198
- Morris, David B. 1985 "Gothic Sublimity" *New Literary History*, XVI-2 : 299-319
- Moretti, Franco 1988 *Signs Taken for Wonders*, Verso = 1992 植松みどり・河内恵子・北代美和子・橋本順一・林完枝・本橋哲也訳『ドラキュラ・ホームズ・ジョイス 文学と社会』新評論
- 中村秀之1989『精神医療の誕生 — 知識社会学的試論 —』東京大学大学院社会学研究科修士論文
- Nicolson, Marjorie Hope 1968 "Sublime in External Nature" = 1986 高山宏訳「崇高美学」『美と科学のインターフェイス』叢書ヒストリー・オブ・アイデアズ1 平凡社：110-137
- Parry-Jones, William Ll. 1972 *The Trade in Lunacy : A Study of Private Madhouses in England in the Eighteenth and Nineteenth Centuries*, Routledge & Kegan Paul
- Porter, Roy 1987 *Mind-Forg'd Manacles : A History of Madness in England from the Restoration to Regency*, The Athlone Press
- Rushton, Peter 1988 "Lunatics and Idiots : Mental Disability, the Community, and the Poor Law in North-East England, 1600-1800" *Medical History* 32 : 34-50
- Ruskin, John 1882 *Sesame and Lilies* = 1979 木村正身訳『ごまとゆり』世界の名著52 中央公論社
- Scully, Andrew T. 1979 *Museums of Madness : The Social Organization of Insanity in Nineteenth-Century England*, Allen Lane → 1982 Penguin Education
- 1983 "The Domestication of Madness" *Medical History* 27 : 233-248
- (ed.) 1981 *Madhouses, Mad-doctors and Madmen : The Social History of Psychiatry in the Victorian Era*, University of Pennsylvania Press
- Shelley, Mary 1831 *Frankenstein ; or the Modern Prometheus* = 1984 森下弓子訳『フランケンシュタイン』（初版1818年）創元推理文庫
- Showalter, Elaine 1987 *The Female Malady : Women, Madness, and English Culture, 1830-1980*, Penguin Books
- Stone, Lawrence 1979 *The Family, Sex, and Marriage in England, 1500-1800*, Abridged and Revised Edition, Pelican Books = 1991 北本正章訳『家族・性・結婚の社会史 1500年-1800年のイギリス』勁草書房
- 高山宏1982「目の中の劇場 — ゴシック的視覚の観念史」小池滋・志村正雄・富山太佳夫編『城と眩暈 ゴシックを読む』国書刊行会：35-92
- 富山太佳夫1975「ゴシック小説史序説」『牧神』(1) → 1982『テキストの記号論』南雲堂：260-297

(なかむら ひでゆき)